

#### 4.4.1.2 動物

##### 1) 哺乳類

###### (1) 調査方法

###### ① 哺乳類相調査

五木村及び相良村における哺乳類の生息に関する既往の文献を整理した。

現地調査としては、調査区域内の尾根、谷、河川敷、樹林地、耕作地などの異なった生息環境を踏査し、足跡、糞、食痕、巣穴などの痕跡調査を行った。また、夜間を含めて目視調査や生け捕りワナを用いた小型哺乳類の捕獲調査などを行った。このほか、地元猟友会を中心とした聞き取り調査を行った。

###### ② 個別調査

哺乳類相調査により確認された種のうち、「熊本県の保護上重要な野生動植物 レッドデータブックくまもと(熊本県、平成 10 年 3 月)」に記載されている重要な哺乳類であるカワネズミと、「緑の国勢調査ー自然環境保全基礎調査報告書(環境庁、昭和 51 年 3 月)」のすぐれた自然調査の対象動物などに該当し、猿害対策や個体数管理などの対象として、その生息の実態の把握が望まれているニホンザルについては、事業の影響の詳細な検討が必要と考えられたため、さらに詳細な調査を実施した。

###### a カワネズミの生息調査

カワネズミは溪流に特徴的にみられる重要な種であり(表 4.4.1.2-3)、文献により湛水予定区域とその周辺区域にも生息すると考えられたため、その生息の実態を把握するため捕獲調査を行った。

###### b ニホンザルの生息調査

ニホンザルは湛水予定区域とその周辺区域に広く分布しており、ダム事業によって生息域の一部減少などの影響が考えられることから、痕跡調査、目視調査、テレメトリー調査、聞き取り調査、関係各機関への情報収集、文献調査などを行った。

上記の調査のほか、九折瀬洞において洞窟性のコウモリ類の生息調査を行った。詳細は「4.4.1.3 動植物の生息・生育環境の特徴. 3) 九折瀬洞」で後述する。

## (2) 調査時期

調査時期は表 4.4.1.2-1 に示すとおりである。

表 4.4.1.2-1 哺乳類調査時期

調査項目		調査時期
哺乳類相調査		・昭和 52 年 7 月 ・平成 4 年 4、5、7、10 月 ・平成 5 年 1、11 月 ・平成 6 年 3 月
個別調査	カワネズミの生息調査	・平成 11 年 6 月、11 月
	ニホンザルの生息調査	・平成 5 年 11 月 ・平成 6 年 3 月 ・平成 9 年 10 月 ・平成 10 年 2、9、10、11、12 月 ・平成 11 年 1、2、3 月

## (3) 調査区域

調査区域は図 4.4.1.2-1～図 4.4.1.2-3 に示すとおりである。哺乳類相調査では湛水予定区域とその周辺区域とし、カワネズミの生息調査では湛水予定区域内の川辺川とその流入支川とした。また、ニホンザルの生息調査では湛水予定区域とその周辺区域ならびに湛水予定区域下流をそれぞれ調査区域とした。

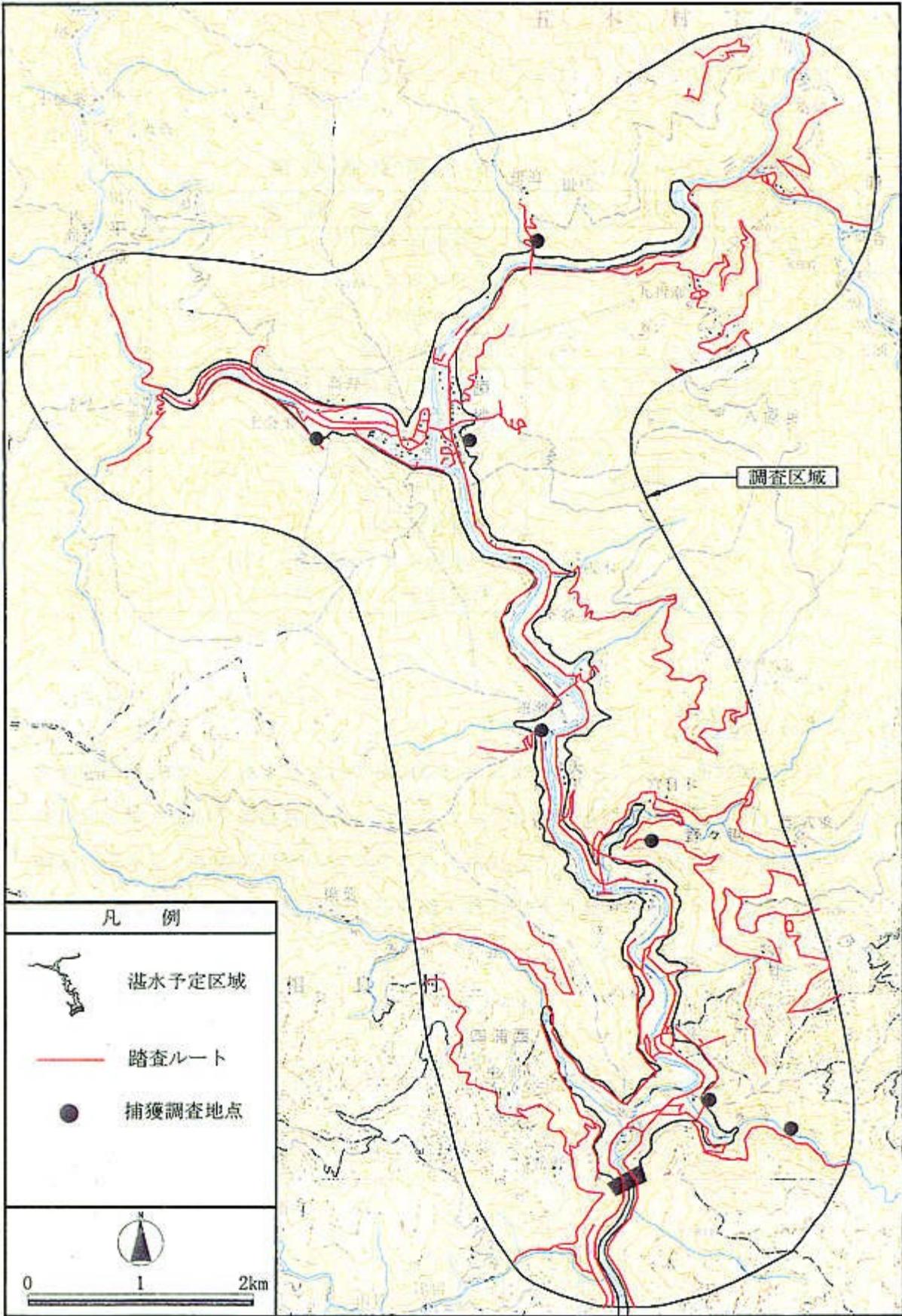


図 4.4.1.2-1 哺乳類相調査の踏査ルート及び調査地点

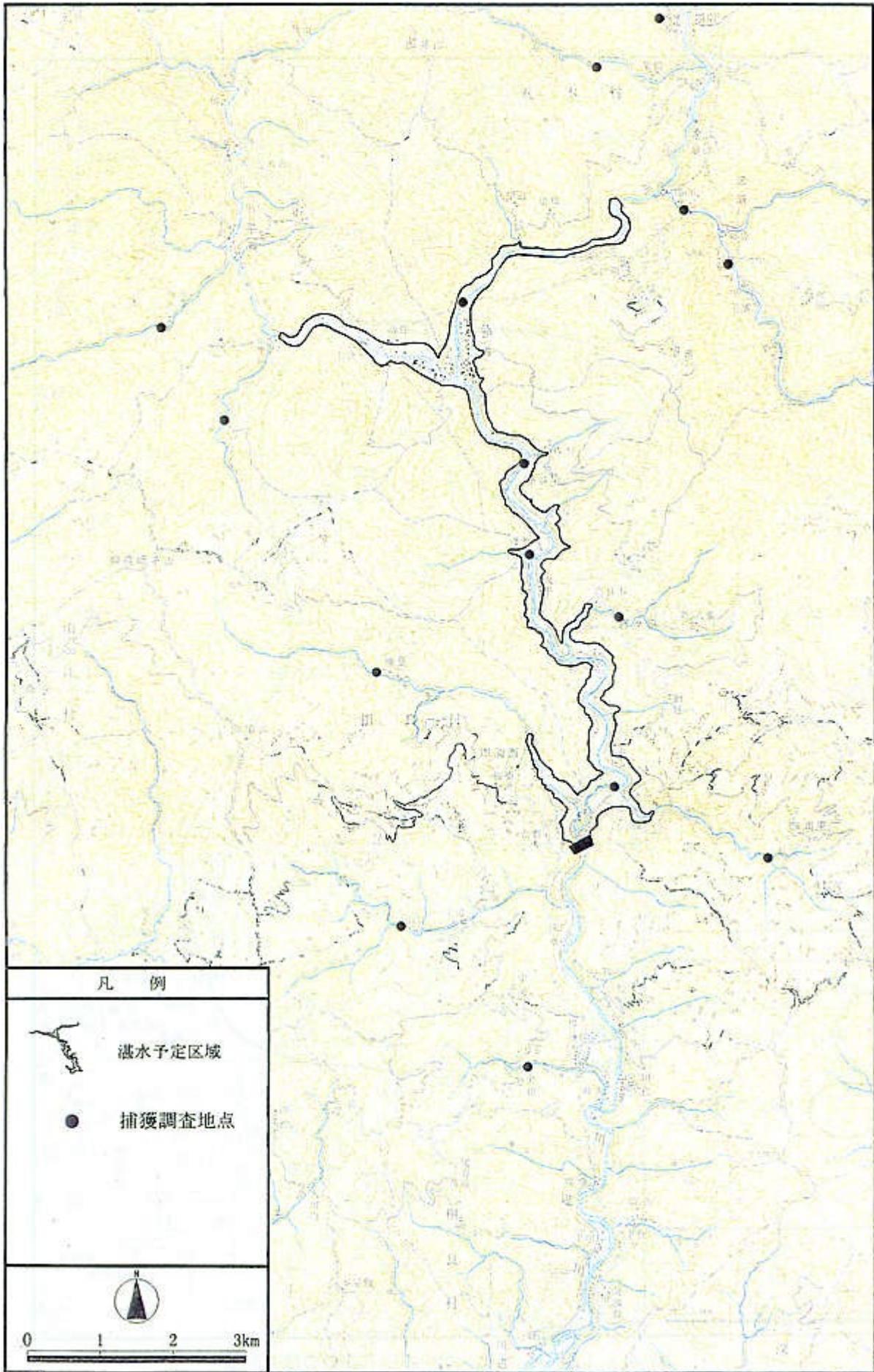


図 4.4.1.2-2 カワネズミの生息調査の調査地点

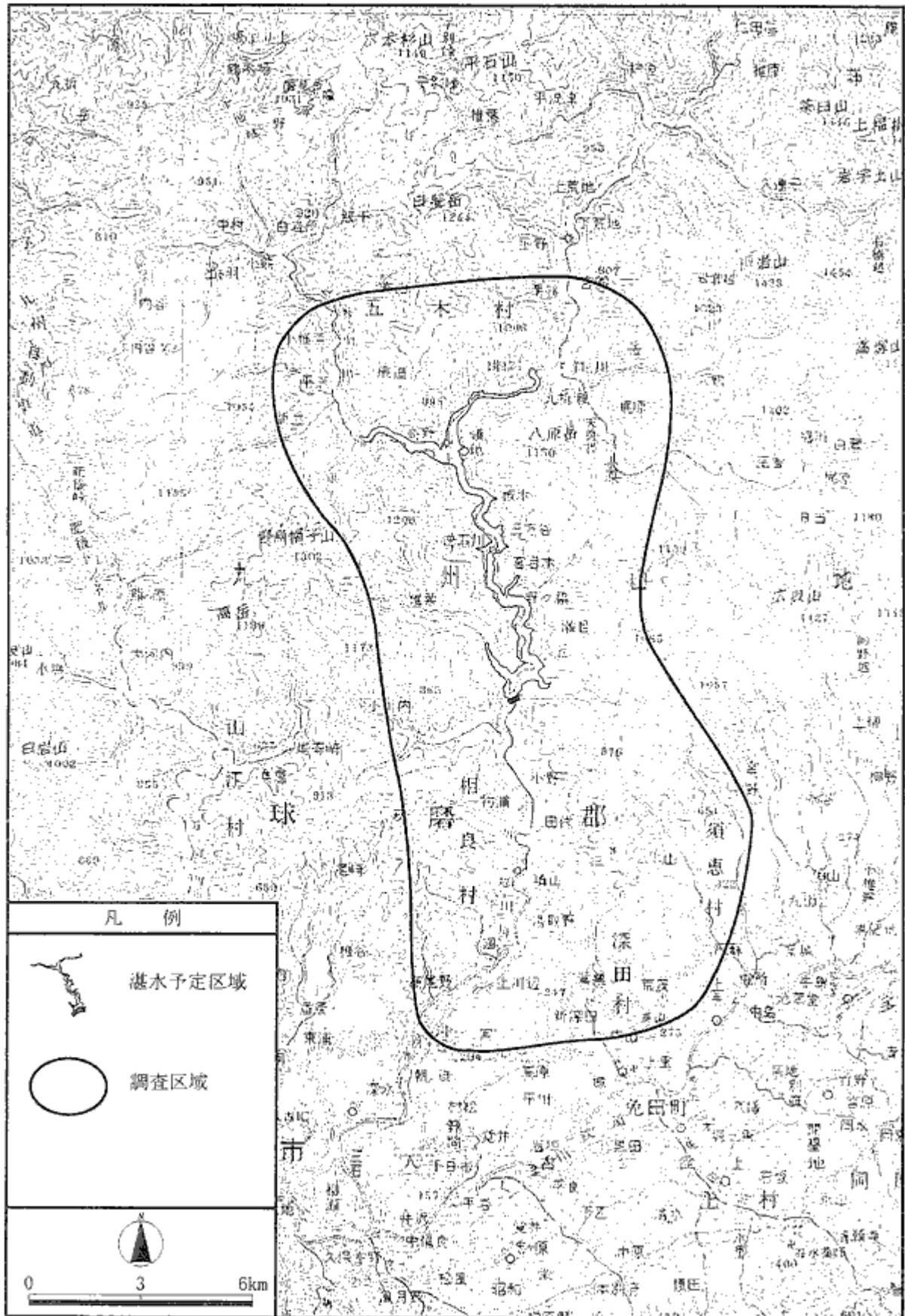


図 4.4.1.2-3 ニホンザルの生息調査の調査区域

#### (4) 調査結果

##### ① 哺乳類相調査結果

表 4.4.1.2-2 に示すとおり、既往の文献では 32 種が記録されており、現地調査では 23 種が確認された。現地調査では、九州に分布する中型・大型の哺乳類のうち大半の種が確認され、自然林の指標種である森林性コウモリ類、ヤマネなどの小型獣やニホンジカなどの大型獣も確認された。聞き取り調査によれば、中型・大型の哺乳類のうちアナグマは現在減少傾向を示しており、ニホンザル、タヌキは増加傾向にあるとのことであった。

なお、以下に示す①～⑤により重要な種を選定したところ、表 4.4.1.2-3 に示すとおり、文献においては 12 種、現地調査においては 8 種が該当した。

- ①「文化財保護法(昭和 25 年法律第 214 号)」、「熊本県文化財保護条例(昭和 51 年熊本県条例第 48 号)」により天然記念物に指定されている種
- ②「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(平成 4 年法律第 75 号)」で指定されている種
- ③「熊本県希少野生動植物の保護に関する条例(平成 2 年熊本県条例第 61 号)」で指定されている種
- ④「環境庁報道発表資料 哺乳類及び鳥類のレッドリストの見直しについて(環境庁、平成 10 年 6 月)」に記載されている種
- ⑤「熊本県の保護上重要な野生動植物 レッドデータブックくまもと(熊本県、平成 10 年 3 月)」に記載されている種

現地調査による重要な種の確認状況は以下のとおりである。

カワネズミは山地の溪流河川に生息する。主として川辺川の事業区域外の流入支川で確認されたが、川辺川本川においても確認された。

コキクガシラコウモリは昼間は洞穴で集団で休息する。事業区域内の九折瀬洞で確認された。

ニホンテングコウモリは昼間は樹洞、洞穴で休息する。事業区域内の九折瀬洞で確認された。

ムササビは平地から山地の森林に生息する。事業区域内外の森林などで確認された。

ヤマネは低山から亜高山の落葉広葉林に生息する。事業区域外の森林に設置した鳥の巣箱に入った個体が確認された。

カヤネズミは平地から低山の草原、河川敷に生息する。事業区域内の川辺川沿いの平坦地の草地で確認された。

イタチは平地から低山の水辺、森林に生息する。事業区域内外の河川沿いなどで広く確認された。

アナグマは平地から山地の森林、林縁に生息する。事業区域内外の森林などで確認された。

なお、文献においてのみ記録があるモモジロコウモリ、ニホンリス、ホンドモモンガ、カモシカのうち、湛水予定区域及びその周辺区域に分布する可能性があるものは、モモジロコウモリ及びホンドモモンガであると考えられる。モモジロコウモリは九折瀬洞で記録がある。ホンドモモンガは、比較的高地の林を好んで生息することから、湛水予定区域内には分布しないと考えられるが、頭地より上流の山の斜面には分布する可能性がある。ニホンリスは熊本県に分布する可能性が低く、またカモシカは熊本県内での分布が限られているため、湛水予定区域及びその周辺区域に分布する可能性は低いものと考えられる。

表 4.4.1.2-2 哺乳類の確認種<sup>1)</sup>

No.	目名	科名	和名	学名	文献 <sup>2)</sup>	現地調査
1	モグラ (食虫)	トガリネズミ	ジネズミ	<i>Crocidura dsinezumi</i>	○	○
2			カワネズミ	<i>Chimarrogale himalayica</i>	○	○
3		モグラ	ヒミズ	<i>Urotrichus talpoides</i>	○	○
4			コウベモグラ	<i>Mogera kobeeae</i>	○	○
5	コウモリ (翼手)	キクガシラコウモリ	コキクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus cornutus</i>	○	○
6			キクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus ferrumequinum</i>	○	○
7		ヒナコウモリ	モモジロコウモリ	<i>Myotis macrodactylus</i>	○	
8			アブラコウモリ	<i>Pipistrellus abramus</i>	○	
9			ユビナガコウモリ	<i>Miniopterus schreibersi</i>	○	○
10			ニホンテングコウモリ	<i>Murina hilgendorfi</i>	○	○
11	サル (霊長)	オナガザル	ニホンザル	<i>Macaca fuscata</i>	○	○
12	ウサギ	ウサギ	ノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i>	○	○
13	ネズミ (齧歯)	リス	ニホンリス <sup>3)</sup>	<i>Sciurus lis</i>	○	
14			ホンドモモンガ	<i>Pteromys momonga</i>	○	
15			ムササビ	<i>Petaurista leucogenys</i>	○	○
16		ヤマネ	ヤマネ	<i>Glirulus japonicus</i>	○	○
17		ネズミ	スミスネズミ	<i>Eothenomys smithi</i>	○	
18			ハタネズミ	<i>Microtus montebelli</i>	○	

19			アカネズミ	<i>Apodemus speciosus</i>	○	○
20			ヒメネズミ	<i>Apodemus argenteus</i>	○	○
21			カヤネズミ	<i>Micromys minutus</i>	○	○
22			ハツカネズミ	<i>Mus musculus</i>	○	
23			クマネズミ	<i>Rattus rattus</i>	○	
24			ドブネズミ	<i>Rattus norvegicus</i>	○	○
25	ネコ (食肉)	イヌ	タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>	○	○
26			キツネ	<i>Vulpes vulpes</i>	○	○
27		イタチ	テン	<i>Martes melampus</i>	○	○
28			イタチ <sup>4)</sup>	<i>Mustela itatsi</i>	○	○
29			アナグマ	<i>Meles meles</i>	○	○
30	ウシ (偶蹄)	イノシシ	ニホンイノシシ	<i>Sus leucomustax</i>	○	○
31		シカ	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>	○	○
32		ウシ	カモシカ	<i>Capricornis crispus</i>	○	
計	7	14		32	32	23

1) 分類及び和名は「日本産野生生物目録 脊椎動物編」(環境庁自然保護局野生生物課、平成5年9月)にしたがった。

2) 文献は以下のものの五木村及び相良村のデータを使用した。

「人吉球磨五木五家荘地区自然公園候補地学術調査報告書」(熊本県、昭和44年3月)

「五木村学術調査 自然編」(五木村総合学術調査団、昭和62年1月)

3) 「熊本県の保護上重要な野生動植物 レッドデータくまもと」(熊本県、平成10年3月)によれば、ニホンリスは熊本県に生息するという確実な情報は得られていない。

4) 本調査で確認されたイタチはチョウセンイタチである可能性が高いが、ニホンイタチである可能性もある。

表 4.4.1.2-3 重要な哺乳類

No.	種名	文献	現地 調査	選定根拠 <sup>1)</sup>				
				①	②	③	④	⑤
1	カワネズミ	○	○					V

2	コキクガシラコウモリ	○	○					R
3	モモジロコウモリ	○						R
4	ニホンテングコウモリ	○	○				VU	R
5	ニホンリス <sup>2)</sup>	○					LP	
6	ホンドモモンガ	○						V
7	ムササビ	○	○					R
8	ヤマネ	○	○	国			NT	V
9	カヤネズミ	○	○					R
10	イタチ <sup>3)</sup>	○	○					R
11	アナグマ	○	○					R
12	カモシカ	○		特				V
計	12	12	8	2	0	0	3	11

1) 重要な種の選定根拠は以下のとおりである。なお、④⑤の定義の詳細については、巻末の資料編に示した。

①「文化財保護法」、「熊本県文化財保護条例」により天然記念物に指定されている種

特:国指定特別天然記念物 国:国指定天然記念物 県:県指定天然記念物

②「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」で指定されている種

I:国内希少野生動植物

③「熊本県希少野生動植物の保護に関する条例」で指定されている種

④「環境庁報道発表資料 哺乳類及び鳥類のレッドリストの見直しについて」に記載されている種

EX:絶滅 EW:野生絶滅 CR:絶滅危惧 IA類 EN:絶滅危惧 IB類 VU:絶滅危惧 II類

NT:準絶滅危惧 DD:情報不足 LP:地域個体群

⑤「熊本県の保護上重要な野生動植物 レッドデータブックくまもと」に記載されている種

Ex:絶滅 E:絶滅危惧 V:危急 R:希少 DD:情報不足

2) 「熊本県の保護上重要な野生動植物 レッドデータくまもと(熊本県、平成10年3月)」によれば、ニホンリスは熊本県に生息するという確実な情報は得られていない。

3) 本調査で確認されたイタチはチョウセンイタチである可能性が高いが、ニホンイタチである可能性も否定できないため、ここでは重要な哺乳類として扱うこととした。

## ② 個別調査結果

### a カワネズミの生息調査結果

図 4.4.1.2-2 に示した 16 地点にトラップを設置して捕獲調査を行った結果、川辺川本川の 1 地点、流入支川の 8 地点で合計 12 個体のカワネズミが捕獲された。

### b ニホンザルの生息調査結果

現地調査では、調査区域内のほぼ全域で数頭～数十頭のニホンザルの集団が確認され、聞き取り調査や関係機関からもサルを目撃したとの情報が得られた。これらの結果から、調査区域には表 4.4.1.2-4 に示す 9 集団が合計で約 450 頭生息していると推定された。なお、「熊本県委託調査 熊本県野生ザル生息調査報告書 昭和 63・平成元年度調査」(財団法人 日本野生生物研究センター、平成 2 年 3 月)の調査結果と比較すると、集団数が 1 つ、頭数が 20 頭、それぞれ増加していた。

表 4.4.1.2-4 確認されたニホンザルの集団の頭数

集団名	頭数		
	昭和 63・平成元年度 <sup>1)</sup>	平成 10 年度	増減
天狗岩グループ	50	40	-10
土会平グループ	60	70	+10
三方谷グループ	30	30	0
野々脇グループ	60	60	0
藤田グループ	100	60	-40
四浦西グループ	50	50	0
大谷グループ	30	50	+20
北岳グループ	50	50	0
川辺川グループ <sup>2)</sup>	—	40	+40
計	430	450	+20

1) 出典:「熊本県委託調査 熊本県野生ザル生息調査報告書 昭和 63・平成元年度調査」(財団法人 日本野生生物研究センター、平成 2 年 3 月)

2) 川辺川グループは平成 10 年度調査で新たに確認された。

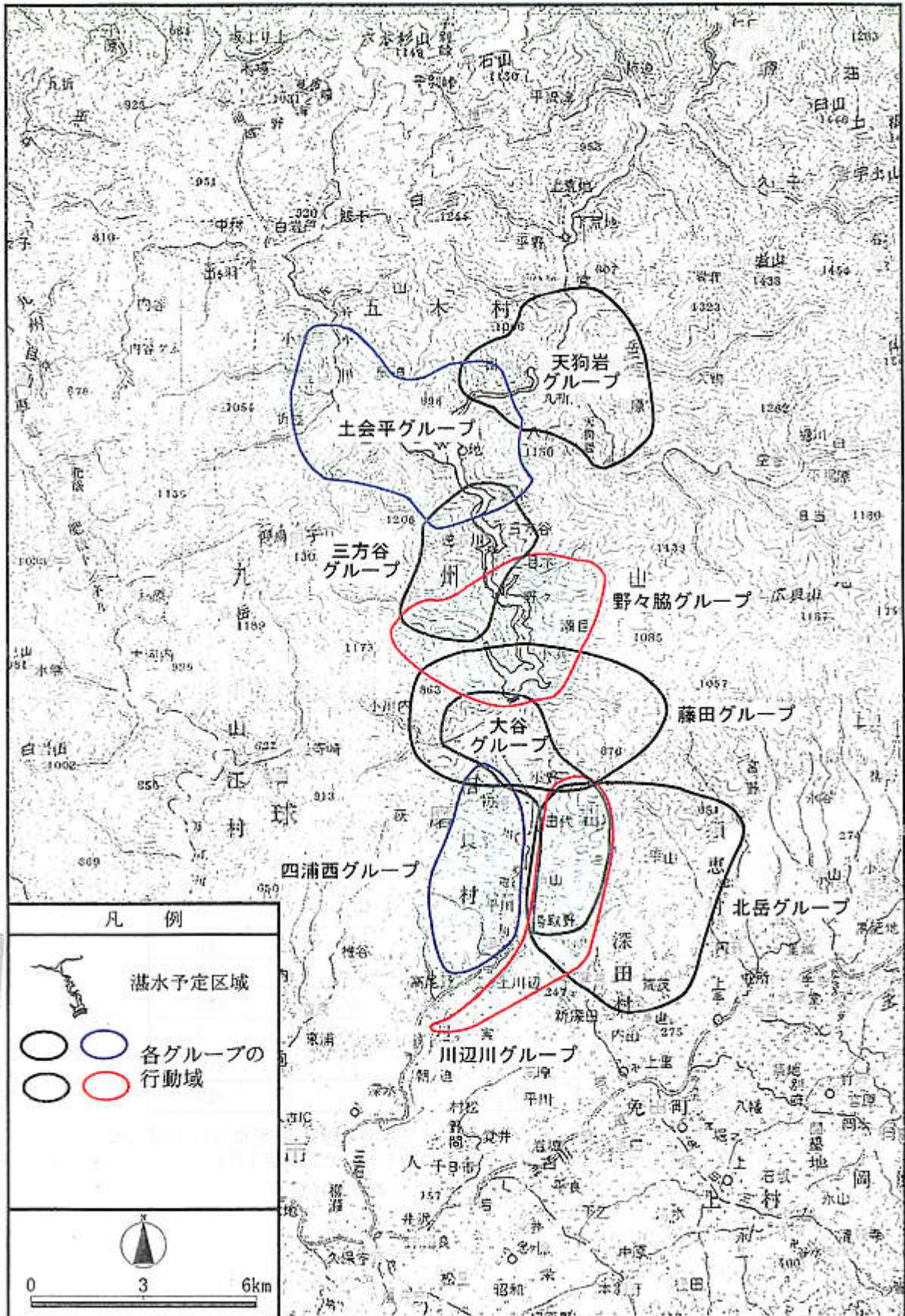


図 4.4.1.2-4 ニホンザルの生息状況